

2025年の夏至(げし)は6月21日(土)で、1年で1番、昼の時間が長い日です。

冬至と比較すると、昼間の時間差は4時間以上もあります。暦の上では夏季の真ん中にあたりますが、実際には梅雨の真っ盛りで、農家では田植えに繁忙を極める頃。暑さのピークは1カ月ほど先になります。

夏至は地方によって様々で関東地方では新小麦を使った焼き餅を食べる風習があります。田植えの時期に小麦も栽培する農家が多く、夏至の頃に新小麦が収穫されることから、焼き餅を食べる習慣が生まれたとされています。焼き餅を食べるだけでなく、神様にお供えすることで、五穀豊穡を願う意味合いもあります。餅のように粘り強く、物事を最後までやり遂げられるように、という願いも込められています。

関西地方では、タコを食べる風習があります。タコが岩に足をしっかりとくっつけている様子から、稲がタコの足のようにしっかりと根を張るように、という豊作祈願の意味があるそうです

半夏生にタコを食べる理由はきつかった田植えまでの農作業を終え、これからの厳しい夏を過ごすためにタコは体によく、元気をつけてくれるからだそうです。

また、これらの地域では、半夏生には『毒気が天から降る』と信じられていたそうで、そのため、青果を食べたり井戸水を飲んだりしてはいけなかったそうです。

立葵が咲き始めました。梅雨入りとともに開花し、てっぺんまで咲くと梅雨が明けるといわれます。

『のびきって 夏至に逢ふたる 葵(あおい) かな』 正岡子規

子規が見たのは立葵(たちあおい)でしょうか？

立葵は梅雨になるとあっという間に背が伸びて、花を咲かせます。



正岡子規の病床の句で、立葵を詠んだ句は結核で病床に

あった子規が伸びきった立葵の花を見て、夏至の頃に咲く様子を詠んだものです。

葵は下から花をつけていく植物です。

上まで咲かなければ部屋の中からは見えないため、夏至の日までに上まで花をつけて「夏至に逢ふたる」状態になったことを詠んでいます

子規が長く病床にあった中で、季節の移り変わりを感じ取り、その中で見つけた美しさを詠んだものと解釈されています。